

## 对人的攻撃行動に対する態度の比較文化的研究\*

ヘスース・マルチン・ラミレス\*\*

藤原武弘\*\*\*

### 問題

攻撃行動は、道徳的な規則や規範によって統制されている。あらゆる社会は、特定の条件下で異なった形の攻撃が許容される程度を示す道徳的な規則を持っている (Wilson, 1978; Forgas, 1980)。この規則が適切な規範に従った行動を統制している。その結果、合理化や受容性の程度に関する道徳的態度や判断が生じる。ある行動はある条件下では合法であるとみなされるかもしれないし、ある行動は別の条件下では合法とはみなされないかもしれない。社会的学習理論によると、社会的、道徳的態度は攻撃の表出を促進したり、抑制したりする。それが、社会生活における攻撃行動の主要な要因となっている。攻撃行動に対して容認的態度が存在すれば、人間の敵意性が否認されている場合よりも、多くの人々がよりしばしば、より強い強度で攻撃行動に従事する (Bandura, 1976; Fraczek, 1985)。

これらの道徳的な規則は、私たちの怒りの感情に影響を及ぼし、そして攻撃的動機づけを誘発するかもしれない。しかしながら、ある場合には、規範と主観的感情は一致しない (Berkowitz, 1962; Fraczek, 1977; Lagerspetz & Westman, 1980)。これらの規範に関しては、フィンランド (Lagerspetz & Westman, 1980) やポーランド (Fraczek, 1985) で質問紙を用いた研究が行われてきた。またスペインの各地方 (カスティジャ、カタロニア、アンダルシア、バスク) を比較した研究もある。(Ramirez, 1993)。更に、Ramirez

(1993) は、フィンランドやポーランドで行われた研究結果とも比較検討し、攻撃行動についての規範や信念に一定の普遍性があることを示唆している。つまり自然法に基づく、全人類に共通するモラル・コードの存在、あるいは、キリスト教文化に共通するモラル・コードの存在を示唆している。Fujihara, Bleckman, Kohyama & Wapner (1995) は、アメリカと日本の大学生の攻撃行動に対する態度を同様の調査方法で比較文化的に明らかにしている。

本研究の目的は、藤原ら (1995) が得たサンプルに新たにスペインで収集したデータと比較することで、攻撃行動に対する態度が文化変数によりどのような影響を受けるのかを明らかにすることにある。こうした作業は、攻撃行動の普遍性がどのような側面において見られるのか、あるいはそうした行動の特殊性がどのような側面で見られるのかを解明することになる。

### 方法

**調査対象者** 日本人大学生242名 (男性137名、女性105名)、スペイン人大学生210名 (男性80名、女性130名)、アメリカ人大学生200名 (男性100名、女性100名)。

**調査内容** 6つの異なる合理化状況 (自分の身を守るとき、他人を守るとき、話合いがうまく行かないとき、興奮したとき、自分の所有物を守るとき、人に罰を与えるとき) の基で、8つの種類の攻撃行動 (いや味をいう、じゃまをする、どなる、怒る、おどす、なぐる、いためつける、殺す) が、

\*キーワード：对人的攻撃行動、態度、規範

\*\*コンプルテンス大学心理学部教授

\*\*\*関西学院大学社会学部教授

許される(1)、許されない(0)で各状況への攻撃行動の許容度の評定が求められた。

## 結果

### 日本人サンプル

日本人大学生の攻撃行動の結果は、Table 1に示されている。許容度の高い順番にならべると、怒る(80%)、どなる(74%)、じゃまをする(57%)、いや味をいう(46%)、おどす(45%)、なぐる(35%)、いためつける(19%)、殺す(9%)となっている。

性別の結果は、Table 2に示されている。性別で有意な差が見られた攻撃行動は、おどす(男性50%、女性38%)、なぐる(男性42%、女性26%)、いめつける(男性24%、女性14%)であった。女性よりも男性の許容度が高い。

合理化状況の容認度の結果は、Table 3に示したように、自分の身を守るとき(57%)、他人を守るとき(56%)、自分の所有物を守るとき(53%)、人に罰を与えるとき(47%)、興奮したとき(38%)、話し合いがうまく行かないとき(23%)

の順になった。

性別で有意な差が見られた合理化状況は(Table 4参照)、自分の所有物を守るとき(男性56%、女性48%)、人に罰を与えるとき(男性51%、女性41%)であり、男性の許容度が高い。

### スペイン人サンプル

スペイン人の攻撃行動の結果は、Table 1に示したように、いや味をいう(78%)、じゃまをする(71%)、どなる(66%)、怒る(62%)、おどす(48%)、なぐる(28%)、いためつける(8%)、殺す(5%)の順になった。

性別で有意な差が見られた攻撃行動は、いや味をいう(男性87%、女性76%)、じゃまをする(男性78%、女性70%)、なぐる(男性33%、女性26%)、いためつける(男性10%、女性6%)であった(Table 2参照)。いずれも女性よりも男性の許容度が高い。

状況の許容度の結果は、他人を守るとき(56%)、自分の身を守るとき(55%)、自分の所有物を守るとき(52%)、興奮したとき(46%)、他人に罰を与えるとき(40%)、話し合いがうまく行かないと

Table 1 Ranking of full acceptance for aggressive acts (total population)

Rank	Japan (N=242)	Spain (N=210)	USA (N=200)	Finland (N=83)	Poland (N=64)
1 st	Ra 80%	Ir 78%	Ir 81%	Hd 1.19	Th 1.15
2 nd	Sh 74%	Hd 51%	Sh 78%	Th 1.00	Ir 1.14
3 rd	Hd 57%	Sh 66%	Hd 68%	Ht 0.80	Hd 1.13
4 th	Ir 46%	Ra 62%	Ra 49%	Sh 0.78	Sh 1.04
5 th	Th 45%	Th 48%	Th 49%	Ir 0.73	Ra 0.99
6 th	Ht 35%	Ht 28%	Ht 39%	Ra 0.70	Ht 0.95
7 th	To 19%	To 8%	Ki 17%	Ki 0.31	To 0.61
8 th	Ki 9%	Ki 5%	To 7%	To 0.28	Ki 0.52

Ra=having rage ; Sh=shouting ; Hd=hindering ; Ir=being ironic ;  
Th=threatening ; To=torturing ; Ki=killing

き (26%) の順になった (Table 3 参照)。

性別で有意な差が見られた合理化状況は、他人を守るとき (男性64%、女性54%)、自分の身を守るとき (男性61%、女性54%)、自分の所有物を守るときであり (男性59%、女性49%)、男性の許容度が高い (Table 4 参照)。

**Table 2 Percentage of full acceptance for aggressive acts (gender differences)**

Japan		Spain		USA	
Male	Female	Male	Female	Male	Female
Ra		Ir		Ir	
77%	82%	87%*	>76%	81%*	>80%
Sh		Hd		Sh	
75%	72%	78%*	>70%	78%	77%
Hd		Sh		Hd	
59%	54%	68%	66%	71%	65%
Ir		Ra		Ra	
45%	47%	65%	61%	51%	47%
Th		Th		Th	
50%*	>38%	52%*	>47%	56%*	>42%
Ht		Ht		Ht	
42%*	>26%	33%*	>26%	45%*	>32%
To		To		Ki	
24%*	>14%	10%*	>6%	21%*	>14%
Ki		Ki		To	
10%	7%	7%	4%	10%*	>4%

\*p < .05

**アメリカ人サンプル**

アメリカ人の許容度の結果は、いや味をいう (81%)、どなる (78%)、じゃまをする (68%)、怒る (49%)、おどす (49%)、なぐる (39%)、殺す (17%)、いためつける (7%) の順になった (Table 1 参照)。

性別で有意な差が見られた攻撃行動は、Table 2 に示したように、おどす (男性56%、女性42%)、なぐる (男性45%、女性32%)、殺す (男性21%、女性14%)、いためつける (男性10%、女性4%) であった。

合理化状況別の許容度は、他人を守るとき (64%)、自分の身を守るとき (62%)、自分の所有物を守るとき (57%)、他人に罰を与えるとき (45%)、興奮したとき (40%)、話し合いがうまくいかないとき (23%) の順になった (Table 3 参照)。

性別で有意な差が見られた合理化状況は、自分の所有物を守るとき (男性63%、女性50%)、他人に罰を与えるとき (男性50%、女性39%) で、いづれも男性の方が許容の割合が高い (Table 4 参照)。

**ヨーロッパ諸国との比較**

Lagerspetz & Westman (1980) のフィンランド・サンプル、Fraczek (1985) のポーランド・サンプル、Fujihara et. al (1996) のアメリカ・サン

**Table 3 Ranking of full acceptance for justifying situations (total population)**

Rank	Japan	Spain	USA	Finland	Poland
1 st	Sd	Al	Al	Al	Al
	57%	56%	64%	1.01	1.27
2 nd	Al	Sd	Sd	Sd	Sd
	56%	55%	62%	0.96	1.25
3 rd	Dp	Dp	Dp	Dp	Dp
	53%	52%	57%	0.79	1.05
4 th	Pu	Em	Pu	Nc	Nc
	47%	46%	45%	0.52	0.81
5 th	Em	Pu	Em	Pu	Pu
	38%	40%	40%	0.41	0.61
6 th	Nc	Nc	Nc	Em	Em
	23%	26%	23%	0.38	0.41

Sd=self-defence ; Al=altruism ; Dp=defense of property ; Pu=punishment ; Em=emotional agitation ; Nc=communication difficulties

**Table 4** Percentage of full acceptance for justifying situations (gender differences)

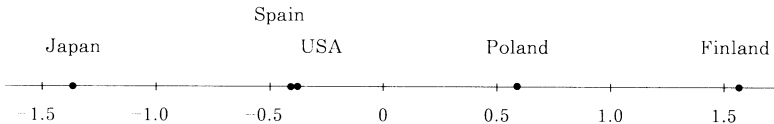
Japan		Spain		USA	
Male	Female	Male	Female	Male	Female
Sd	Al	Al		Al	
58%	55%	64% * >54%		66%	61%
Al	Sd	Sd		Sd	
58%	53%	61% * >54%		63%	61%
Dp	Dp	Dp		Dp	
56% * >48%	59% * >49%	63% * >50%			
Pu	Em	Pu		Pu	
51% * >41%	48%	45%		50% * >39%	
Em	Pu	Em		Em	
40%	35%	39%	41%	42%	39%
Nc	Nc	Nc		Nc	
24%	21%	28%	24%	26%	21%

\*p < .05

**Table 5** Kendall correlation coefficient for aggressive acts

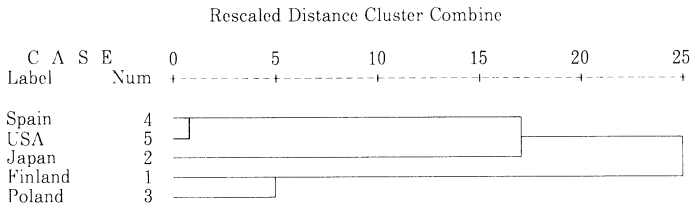
Japan	.2143			
N( 8)				
Sig .458				
Poland	.5000	.2857		
N( 8)	N( 8)			
Sig .083	Sig .322			
Spain	.3571	.5714	.7143	
N( 8)	N( 8)	N( 8)		
Sig .216	Sig .048	Sig .013		
USA	.4001	.5455	.6183	.8365
N( 8)	N( 8)	N( 8)	N( 8)	
Sig .170	Sig .061	Sig .034	Sig .004	
Finland	Japan	Poland	Spain	

(Coefficient/(Cases)/2-tailed Significance)



**Figure 1** Stimulus coordinates for aggressive acts

Dendrogram using Ward Method



**Figure 2** Hierarchical cluster analysis for aggressive acts

ブルと本研究のスペインと日本のサンプルとの攻撃行動の比較を行ったのが Table 1 である。測定尺度が異なるので順位尺度のレベルで比較が行われている。この結果から明らかになったことは、いためつける、殺すといった身体的攻撃の許容度が低いという点では共通性が見られる。それに対して相違点としては、日本は怒る、どなるといった直接的な言語による攻撃行動への許容度が高い

が、フィンランドやポーランドでは、相対的に許容度が低い。また、いや味をいう、じゃまをするといった間接的な言語による攻撃行動は、スペインやアメリカでは許容度が高い。

こうした五つの国間の攻撃行動の類似性を明らかにするために、ケンドールの順位相関を算出した (Table 5)。これらの相関マトリクスの結果によると、アメリカとスペインが最も近く、ポーラ

ンドとスペイン、ポーランドとアメリカと続く。それに対して、遠い関係にあるのは日本とフィンランド、日本とポーランドである。

こうした国と国との関係を構造的に明らかにするために、多次元尺度構成法とクラスター分析法が適用された。測定尺度が異なるので標準得点に換算後、距離行列を求め、アルスカル法で解析した。Young の S-stress 公式 1 は、一次元解で .01 と満足のいく値が得られた。刺激布置は Figure 1 に、クラスター分析(ワード法)の結果は Figure 2 に示されている。これらの結果によると、ポー

ランドとフィンランドと日本、アメリカ、スペインという二つのグループに分かれることが明らかになった。

次に合理化状況の順位を示したのが、Table 3 である。この結果を見ると、攻撃行動ほど国による顕著な違いが見られない。そこで、合理化状況の類似性を明らかにするために、攻撃行動と同様の手続きで順位相関を算出した (Table 6)。一見すれば合理化状況の順位相関は、攻撃行動のそれと比較して低い。これら相関マトリクスの中央値を計算すれば、攻撃行動  $r = .52$  合理化状況  $r = .73$  となり、合理化状況得点は国による差があまりない、状況間には類似性が高いことを示唆している。

攻撃行動の結果と同様の分析を試みたのが、Figure 3 と Figure 4 である。ストレス値は .002 とかなり低い。日本、アメリカ、スペインが一つのまとまりをなし、フィンランドとポーランドがもう一つのまとまりをなしている。

Table 6 Kendall correlation coefficient for justifying situations

Japan	.6000			
	N( 6)			
	Sig .091			
Poland	1.0000	.6000		
	N( 6)	N( 6)		
	Sig .005	Sig .091		
Spain	.6000	.7333	.6000	
	N( 6)	N( 6)	N( 6)	
	Sig .091	Sig .039	Sig .091	
USA	.7333	.8667	.7333	.8667
	N( 6)	N( 6)	N( 6)	N( 6)
	Sig .039	Sig .015	Sig .039	Sig .015
	Finland	Japan	Poland	Spain

### 考 察

攻撃行動の相関行列マトリクスから全般的に結論できることは、文化や社会の違いを越えて、攻撃行動や合理化状況には類似性が見られ、全人類に共通するモラル・コードの存在を示唆しうる

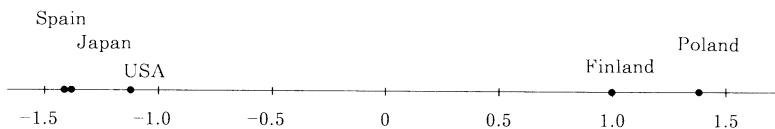


Figure 3 Stimulus coordinates for justifying situation

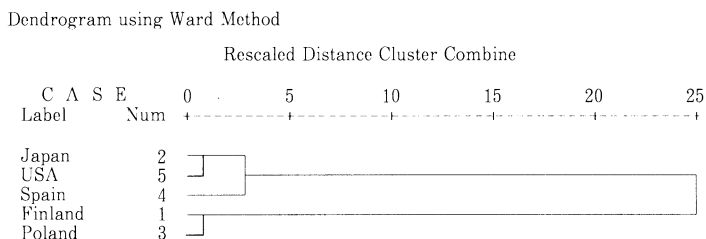


Figure 4 Hierarchical cluster analysis for justifying situation

データが得られた。特に、いためつける、殺すといった身体的攻撃行動の許容度はいずれの国でも低く、また、自分の身を守るとき、他人を守るときといった、防衛的狀況ではすべての国で容認度は高いという、類似点あるいは共通性が観察されている。

すべての行動や状況ではないが、一部の行動や状況項目で、女性よりも男性の方が攻撃行動への許容度が高いという結果は、文化や社会を越えた性差の一貫性を示唆している。特に、なぐる、いためつける、殺すといった、身体的攻撃行動の次元で男性の許容度が高く、性による有意差が見られたという事実は興味深い。こうした知見は、子どもの頃から男の子は女の子に比べて、攻撃的であるという Rohner (1976) の結果とも一致している。また、Bjorqvist, Osterman, & Kaukainen (1992) は、15歳の男の子と女の子の間では言語的攻撃性においては差はないが、他人の噂話をする、仲間はずれにする、社会的操作を行うといった、間接的な攻撃行動を女の子は男の子よりもよく行い、それに対して、女の子は身体的攻撃行動は男の子に比べて少ないことを明らかにしている。こうした身体的な攻撃行動の性差は、文化的に媒介された幼児からの経験が作用する学習的影響力の産物なのか、先天的に組み込まれた攻撃的な遺伝子の影響によるものか、現在のところ明らかではない。恐らく両者の要因が関与していることは間違いないが、今後の研究課題であろう。

普遍性よりも特殊性を明らかにするために、多次元尺度法ならびにクラスター分析法で細かい分析を試みた。その結果興味深い点が明らかになった。すなわち、攻撃行動であれ、合理化状況であれ、ポーランドとフィンランド、そしてアメリカ、スペイン、日本といった二つの群に分かれることが分かった。こうした違いを生み出した要因としては、どのようなものが考えられるのだろうか。Hofstede (1991) は文化の違いを説明する変数として、権力格差、集団主義対個人主義、女性らしさ対男性らしさ、不確実性の回避の四つの次元を指摘している。上記の二つの群を分けると推測される次元は、女性らしさ対男性らしさではないだろうか。日本やアメリカは男性らしさで高得点を示し、フィンランドは女性らしさで高得点を示し

ている。ポーランドは Hofstede (1991) の資料にはないが、女性らしさの強い文化はヨーロッパの北西部に集中しているという指摘があるし、The Chinese Culture Connection (1987) の研究では、ポーランドは女性らしさ得点が高い。攻撃行動には文化や社会の因子が関与していることは、多くの研究者によって指摘されているが、文化差のどのような次元と関連しているかはいまだに定かではない。女性らしさ対男性らしさの次元と攻撃行動との関係性は、今後数多くの国々で同様の調査を繰り返し、資料を蓄積することで明らかにしてゆく必要がある。

#### 引用文献

- Bandura, A. 1976 Social learning analysis of aggression. In Ribes, E. & Bandura, A. (Eds.) *Analysis of delinquency and aggression*. Hillsdale: Erlbaum.
- Berkowitz, L. 1962 *Aggression: a social psychological analysis*. New York: McGraw-Hill.
- Bjorqvist, K., Osterman, K., & Kaukainen, A. 1992 The development direct and indirect aggressive strategies in male and female. Bjorqvist, K. & Niemela, P. (Eds.) *Of mice and women: Aspect of female aggression*. San Diego: Academic Press.
- Feshbach, S. 1979 The regulation and modification of aggression: commonalities and issues. In Feshbach, S. & Faczek, A. (Eds.) *Aggression and behavior change*. New York: McGraw-Hill.
- Forgas, J. P. 1980 Images of crime: a multi-dimensional analysis of individual differences in crime perception. *International Journal of Psychology*, 15, 287-299.
- Fraczek, A. 1977 Functions of emotional and cognitive mechanisms in regulation of aggressive behavior. *Polish Psychological Bulletin*, 8, 195-206.
- Fraczek, A. 1985 Moral approval of aggressive acts: a Polish-Finnish comparative study. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16, 41-54.
- Fujihara, T., Blechman, S., Kohyama, T., & Wapner, S. 1996 Attitude of American and Japanese students toward interpersonal aggression. *Kwansei Gakuin University Social Sciences Review*, 1, 1-8.
- Hofstede, G. 1991 *Cultures and organizations: Software of the mind*. McGraw-Hill. 岩井紀子・岩井八郎 訳 1995 多文化世界 有斐閣
- Lagerspetz, K. P. & Westman, M. 1980 Moral approval of aggressive acts: A preliminary investigation. *Aggressive Behavior*, 6, 119-130.

- Ramirez, J. M. 1991 Similarities in the attitude toward interpersonal aggression in Finland, Poland, and Spain. *Journal of Social Psychology*, 131, 737–739.
- Ramirez, J.M. 1993 Acceptability of aggression in four Spanish regions and a comparison with other European countries. *Aggressive Behavior*, 19, 185–197.
- Rohner, R. P. 1976 Sex differences in aggression: Phylogenetic and enculturation perspectives. *Ethos*, 4, 57–72.
- The Chinese Culture Connection 1987 Chinese values and the search for culture-free dimension. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 18, 143–164.

## Cross-Cultural Study of Attitudes toward Interpersonal Aggression

### Abstract

The degree of acceptance of various forms of aggression in different situations was investigated by questionnaires administered to students from Japan, Spain, and U.S. A.. These data are also compared with similar studies in Finland and Poland. Although some minor differences were found among the different countries as well as gender differences, very similar acceptance patterns of physical aggression and defensive justifying situations were observed in all the populations studied, suggesting a certain universality of norms and beliefs in industrialized societies.

**Key words** : interpersonal aggression, attitudes, norms, cross-cultural